

---

# グット バット ゲーム

零夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グット バット ゲーム

### 【Nコード】

N9705X

### 【作者名】

零夜

### 【あらすじ】

僕は、最悪なゲーム世界のバトルに巻き込まれてしまった。どうも僕には、特別な力があるらしい。僕には、わからない。

## ゲームシステム

バーチャルリアリティ。

つまり、仮想現実。

が可能になったこの世界。

流行中のゲームがあった。それが、

グットバットゲーム武器も進化したこの時代で、

デリートされるプレイヤーがいるのは、珍しいことでは、ない。

僕は、そのゲーム世界に。巻き込まれてしまった。

僕の名前は、紙波 雄太。

ユーザネームは、ヤウト・ヤウトレザー。

どうして、こんな名前が付けられたのかは、僕には、わからない。

けど。先生は、知っていた。

そう。グットバットスクールの先生だ。

僕は、そのスクールに通う。内気な少年・自分で認めている。

## バーチャルオン。(前書き)

いつものようにスクールに行く僕、  
けど、いきなり敵が襲ってきて。何人が失う。  
最初から大きな戦いが待っていた。

## バーチャルオン。

紙波 雄太「はあ疲れた。僕のうちから遠いよここ。」  
なんとなく教室にはいった。

先生「やあ、みんな。今日は、一人一人のスキルについて授業だ。」

雄太「聊か面倒な授業ですねw」

先生「おいおい。紙波。今日の午後、なにがあるかしってる?」

雄太「午後?なにがあるんですか?」

生徒達「えええ?あいつしらねえの?おいおい大丈夫かよ。」

「そう。合流戦。相手は、あの。Fエリア都市の。マキミズナド  
オル学園。」

あそこは、殺しをめいんにした戦術。」

雄太「君。だれ?」

「私?私は、早乙女 香奈鏝。ユーザー名マベロツテ アスク。貴  
方の仲間。」

よろしく」

「僕は、紙波 雄太。ユーザー名。ヤウトレザーです」

互いの名を名乗ることで。認証可能となる

このシステム。イグニシングルシステム。と言うらしい。

「君が。雄太君ですね?僕は、緑山 稼因。ユーザ名は、カリフォ  
ウル フォースト。」

よろしくお願いします。足手まといは、嫌いですからね?」

先生「うむ。では、認証完了のようだな。バトルに備えておいてく  
れ。それと。雄太、

君は、不思議な力を持っているようだね」

## バーチャルオン。(後書き)

そんなこんなで。バトルすることになったそう。

その戦いは、苦しいものか？はたまた楽な物か？

次回、バーチャルオン(続編) 戦術が勝利への近道。

## 交流戦。(前書き)

合流戦、または、交流戦。または、大量犠牲をだした戦い。呼びかたは、たくさんある。

けど。その時の犠牲たちは、もう・帰ってこないのだ。

## 交流戦

先生「君には、最初の武器。ダブルレザースhotsを与える」

雄太「ダブル．．レザー？」

先生「君にししか使えない武器さ。どうも君は、とんでもない。レザースキルを持っているようだね？」

雄太「はい。」香奈鑄「それをいかして．．今回の目的を手に入れて。あれがあれば、私たちは、強くなれる」

雄太「目的？あれ？つて、なんですか？」

稼因「おそらく。P U A I レザースナイプ。のことだろう」

先生「うむ。あれは、人を選ぶ。」

雄太「僕にそれを、とれと？無理だよそんなの！！大体、戦うつて時点で無理だよ！！」

怖いよ！！そんな強い所と当たろうだなんて。」

香奈鑄「怖いのは、同じ．．大丈夫。その時は、私が守る。」

雄太「顔。赤いよ？どうしたんですか？」

稼因「出たよ。急サイン。なるべく気づいてあげるよ？僕は、興味ありませんから」

あれあれ？そろそろ。時間ですよ？スクールの皆さん？

突然校庭から。おそらくメガホンであろうものを使った。

先生「君たちは、マキミズナドオル．．」

「そう。私が委員長。製襦 瀬名。ユーザ名。リバリー リカウド。

さあ、ヤウトレザーは、一人で出てきなさい。」

雄太「ちっ．．」

香奈鑄&稼因「断る」

製襦 瀬名「そうですか．．ですつてよ。学級委員。愈井美 浩一郎。」

愈井美 浩一郎「いま紹介を受けたものだ。ユーザ名。カリフォ

ウリ リマージュ。だ。

いるだろ？カリフォルニア フォースト。」

稼因「貴様は、僕が倒す。リマージュ」

愈井美「楽しみにしてるよ。エリート」

先生「さて、もういいかな？」

瀬名「いいでしょう」

先生「バーチャルオン！！」

瞬間、校庭が光ったかと思うと。

大都市にいる。

先生「ここが、大都市だ。まあ、ファーストステージかな」

ヤウト「じゃあ多分、普通呼ぶんじゃないかと聞か  
えないんだね。アスク」

アスク「そうね．．．ここでは、ユーザ名以外で、よんでも聞こえな  
いわ。ところで。フォーストは、？」

フォースト「僕なら、相手の学級委員を尾行中だ。少しむかつと来  
る奴だからね。」

アスク「一人で。グイグイすすまないで．．．」

フォースト「心配には、及ばない。なあーに。すぐ帰るさ。これよ  
り。戦闘フェイズに入るため。」

無線をきるぞ？」

「ピッ」

先生「それと、ヤウト。もしもの時は、マルチセレクトを利用しろ。」

ヤウト「マルチセレクト？あの武器の一瞬転送ですか？」

アスク「そう、一瞬転送。それは、勝ちを意味するもの。でも．．  
この子、そんなに武器使えないんじゃない」

先生「いや、問題ない」

アスク「相手の能力、冷静さを。EGを使ってウイルスを送り込み  
ます．．．くはあうっ！！」

先生「大丈夫か？俺がやろう．．．グッアアアアア！！まずい。

相手に築かれてる」

ヤウト「もしかすると．．脳波ですか？」

先生「そうだ。だがな、危険なわざで。神経崩壊もする。ハイパルEGがあれば」

ヤウト「僕がやります」

先生「止めなさいっ今の君には、」

アスク「わかったわ。」

先生「アスク!!!」

アスク「自分からやるといふ。それは、自分の強さです。ヤウトの強さは誰にも．．奪う権利がありません」

ヤウト「敵の数。およそ。35．敵のスキル。ミサイル。ウイル  
スを送り込んでくる。」

これが相手の神経か．．捻じ曲げる。」

「グググググググ」

相手生徒「ガアアアア! ! 痛い痛い! !」

リバリ「うっ! ! ああああああ! ! クツ．．今のでHPが半分。やるわね」

ヤウト「ふう。相手の神経、少し崩壊させておきましたよ?」

先生「うわあ．．恐ろしいことするな」

アスク「可愛い顔をしていて。恐ろしいことをする．．うは／／  
かっこいい．．かも／／」

先生「アスク? いったい何を?」

アスク「うっ。いえ、なにも。それより先生。私たち一回二人で」

先生「駄目です貴方の考えてることくらいわかるよ。」

アスク「シユン．．ヤウト．．」

ヤウト「う、うわあ! ! 何ですか? こんな昼間から／／」

アスク「現実世界では、夜中二時。問題ない／／」

ヤウト「戦闘がおわってからでしょ?」

こわいよこの人。いきなりひょだよ;

何考えてるんだろ? ;

アスク「帰ってから．．うん。」

先生「あのう。これ、そう言うジャンルじゃないんですけど?」

アスク「ごめんなさい」

相手生徒「おらっ!!」

ヤウト「敵!!レザースョット!!」

「ビシユン!!」

相手生徒「クッ．．」

ヤウト「デリートEG開始」

相手「ああああ!!」

相手は、のどから大量の血を吐き出し。

死ぬ

ヤウト「．．．こんなこと。」

先生「やるしかないんだ」

アスク「グロテスク．．嫌いじゃない」

ヤウト「えっ?．．じゃあすきってこと?」

アスク「ふふふ．．」

ヤウト「先生．．」

先生「そう言う奴だ。許してやれ」

ヤウト「は、はい」

アスク．．

貴方は、なに趣味なんでしょう;

僕は、怖いです><;

つづく



交流戦 (後書き)

いよいよ。戦闘を開始したヤウト。

そして、アスク；

アスク「グロテスク．．くふふ。」

そんな静かに笑わないでください；

と言う訳で次回へつづく！！

早い決着。(前書き)

僕は、いま。ある学園とバトル中だ。

そして、敵の動きが変わりだす。

そのとき僕は、どうするのだろうか？

## 早い決着。

ヤウト「ふう．．．もうそろそろ終わりか？」

アスク「違う．．．」

ヤウト「えっ？」

先生「敵の動きがおかしい。ヤウト頼めるか？」

ヤウト「わかりました。ハイパルEG発動．．．」

んっ？なんだ？おかしい。敵が。

あのビル街のほうに回ってる？

その先にいるのは、

はっ．．．僕たち三人だ。

ヤウト「うっ！！」

僕の頭の中に電気で撃たれるような。なにかで刺されるような痛みが走りぬける。激痛が走る。

ヤウト「ああ！！」

アスク「ヤウト？」

先生「どうした？」

ヤウト「僕のEGより上の生徒です。どうやら、相手の攻撃みたいです」

先生「よし突っ込むぞ！！」

ヤウト「待ってください」

アスク「ヤウト君？」

ヤウト「敵は、こっちに向かって来てます。そして。おそらく。あのビルの中のどこかに

PUAイレザースナイプがあります！！」

先生「どうするんだ？」

ヤウト「いい作戦があります。」

先生「なにっ？」

ヤウト「と言うより。戦術かな？」

僕は、ニヤリと笑う。

ヤウト「フォースト。」

「ピ」

フォースト「なんです？今、バトルなうなんですけど」

ヤウト「そこにも無駄だ」

フォースト「無駄？とは、？」

ヤウト「敵は、僕たちのいる場所に進路をかえてる。

そして、近くにビルあつたる？」

フォースト「ええ。それが？」

ヤウト「そこに。レーザー sniper があるんだよ．．」

フォースト「なんだと？」

ヤウト「間違えない。今、フォーストが追ってるそいつクリフォウ  
リ リマー ジュは、おとり。

敵の本当の狙いは、レーザー sniper を GET して。上から僕たちを  
撃ち。

勝利する作戦なんだ！！」

フォースト「では、どうするのだ？」

ヤウト「その作戦、僕たちのものにして？アレンジ加えてさ。」

フォースト「面白いですね．．では、どうすれば？」

ヤウト「僕たちがいる場所に。敵をおびき寄せて。そして、持ちこ  
たえてほしいんだ。

でもそのクラス委員は、邪魔だから、その人を、言い方がやだけど。  
殺して。

そして、委員長だけを残すんだ。それに築かれないようにね？

なるべく早く、僕は、レーザー sniper を探しにいくよ」

フォースト「了解．．貴方の根性、見せてくださいよ？」

ヤウト「うん。がんばる。じゃ」

「ピッ」

アスク「じゃあ．．」

先生「私たちも協力しよう！！」



早い決着。(後書き)

いい作戦を思いついたヤウト。  
果たして、その結末は？

PUAI・・・(前書き)

僕は、PUAIを取るため。一人、警備がすごすごるビルの中にいた。

P U A I . . .

ヤウト「んっ?」

やっぱりだ。ビルの中は、警備がすごい。

でも、それなら、なぜ動かないんだ?

いくら、バーチャル世界とは、いえ。

動かないやつがいるか?まさか。

あいつらの仲間?

警備A「了解しました。リバリー」

リバリー?やっぱり。

あいつは、ここまで動かせるのか?

リバリー「私たちは、今。大変危険な状況なのです。絶対にP U A

Iだけは、守りなさい」

警備A「りょうか、うっ、ぐあっ!!」

リバリー「どうしたの」

ここは、脳波を変えて。声を変える。

ヤウト「よう．．あんたが。あの委員長か?」

リバリー「あなたは、誰です?」

ヤウト「誰って?ヤウト。」

リバリー「相手側の人ね?」

ヤウト「今、俺は、P U A Iのある。ビル内。一階にいるんだけど

よ?」

リバリー「何ですって?」

ヤウト「どうする?必死に守れるかな?じゃあね。ああ、それと。

今、あなた達の側の連絡手段は、

ほとんど使えないから。」

リバリー「何を．．」

ヤウト「警備たちの脳波に。ウイルスを打ったんだよ。しかも。発

狂って、名前のね?」

いま。あんたの所へ向かわせることも可能なんだけど?」

リバリー「やってみなさい」

ヤウト「おいおいだってよ。あいつらの仲間、半分殺して来いよ?」

警備S「はい。わかりました」

ヤウト「がんばってねえ」

リバリー「ちよつと。」

「プチ．．」

ヤウト「ふう、はったり咬ますって、意外と大変だね?ねえ?警備さん。」

警備S「貴様!」

ヤウト「動かないでっ!!君の頭が焼かれるよ?」

警備S「やってみろ」

ヤウト「残念だよ。」

「ビシユン!!」

警備達「うわああ!!本当に切れた。いや、やかれた。」

そこには、僕が焼いた人の生首が転がってた。

今の僕は、脳波を変えた。意識は、あるけど。

バイオレンスEG。とでも言ったらいいのかな?

頭の中をグロイ事でいっぱいにして。それを利用したわけです。

最初は、きつかったけどね;

ヤウト「僕は、本気でやるよ?いいの?」

警備「いまだっ!!」

誰かが縄をほどいたのか。一斉に向かってきて。銃を撃たれたけど。

「さっ．．」

ヤウト「遅いよ。みんな。ばいばい。」

「ビシユン!!ビシユン!!」

「グチャ．．」

ヤウト「僕は、行動をすればするほど。バイオレンスに染まる。覚えておいてね?

ね?最後の一人さん」

警備態リーダー「まっ．．待ってくれ俺にもかぞくが．．」

ヤウト「うるさいよ」

「グチャ」

ヤウト「二階だね。」

僕は、二階にあがる。バイオレンスなままで。

ヤウト「へえ．．二階は、みんな、EG使いかあ。ちょっと厄介かな．．まあいいや。みんな

殺しあえよ」

2階警備「あああ！！みんな。みんな死ねばいいんだ！！お前らがいなければこんなことには！！」

2階警備B「さて．．人のせいにしてやがったためえから殺してやらあ！！！」

ヤウト「見苦しい。けど。仕方ないよね？」

そのまま僕は、最上階まで上がる。そこには、

ヤウト「んっ？」

「ボオ！！！」

火に触れて焼けるような音がした。

これは、殺人型の赤外線。そう「ブラッドライン」

ヤウト「ちっ．．ここまでかよ．．みんな」

ごめんとおうとした瞬間。

僕は、目にした。

ヤウト「あれは？あのスイッチを破壊すれば」

「ジュン！！ボツ！」

僕のレーザーショットが逆に消滅。

どうすれば．．じゃあ。

あっ。そうだ。

ヤウト「マルチセレクト！！レーザーダガーナイフ。その数。25をここへ転送！！」

このゲームにさんかしてる誰もが共通で使える技。「マルチセレクト」

自分のスキルにあった。ぶきなら。何でもおっけい。だけど．．  
スキルが違ったりすると。逆に武器を扱えず。自分の咽や心臓、頭に刺してしまう。

そして、マイデリーティング。「自分で自分をデリートしてしまう。恐ろしい技」

僕は、どうやら、スキルがレザラーらしいから。

これが使えぬ。

ヤウト「よし。あのスイッチに向かって」

「シュッ！」

「ガチンッ！！」

と音がして。スイッチが壊れ。ブラッドラインが解ける。

ヤウト「これがP U A I レザースナイプ。」

僕は、手を伸ばした

「ビリッ！！」

ヤウト「くっ．．この武器を僕に登録してください。inレザー！！」

インレザー。その名のとおり。僕に登録することだ。

けど、そのときの熱さに耐えないといけない。ナイフやカッター。

ソードなら痛み。

薬とかなら飲んだときの副作用．．苦しみに耐えなければ。武器に

弾き飛ばされてしまう

ヤウト「うっ、ゲアアアアアアア！！」

僕は、最上階で。悲鳴を上げる。

ヤウト「クッ。はあはあ．．やっぱりレザースキルは、強いらしい

けど。きついね

それより早く上にいかなきゃ！！」

僕は、ドアを開け。屋上へ出た。

ヤウト「後はここで。アプローチ．．集中力との戦いか．．そして、

この薬。

手ぶれ防止の。ディプティムドム．．これはきついらしい」

僕は、ディプティムを飲む。

効き目は、集中力が続く限り。少しでも邪魔が入ったり。電話で会話したりしたら。

集中力が切れ。副作用が急激に訪れるだろう。もちろん、激痛となつて。

ディプティムの激痛は、半端じゃない。僕ならきつと。マイデリーディング。一直線だろ。

この薬のような。能力アップドラックは、いくつもある。どれも苦痛を伴う。その分便利。

フォースト「こちら、フォーストだ。そっちは、どうです?」

僕は、メールで返事を打つ。

「うん。P U A I ゲットしました。でも。ディプティム使用中のため。話は、できません」

フォースト「了解」

さあ、最後だね。

PUAI・・・(後書き)

いよいよ決着かと思いきや。

次回へ、すごく便利なディプティム・

けど、それは、危険な手だった。

作戦終了 犠牲1名。(前書き)

いよいよ。作戦終了。

でも、敵が居るのは、ここだけじゃない。

遙かにけた違いのレベルを持つ。学園もきつと・・・

作戦終了 犠牲1名。

フォースト「ヤウト以外に連絡。PUAゲット。あのビル上にてアプローチ。と言っことらしい」

先生「やったか!!」

アスク「まだ、早いわ..」

私達は、これから、あの委員長を狙いやすくしてあげないといけない。」

先生「分かてるさ、さあ。出番だな!!」

相手生徒「すきありっ!!」

アスク「おそい..」

(ダダダダ!!)」

相手生徒「うっ..がはっ!!」

相手生徒「後ろあぶねえよ?」

(ヒュン)

相手生徒「よけられた?」

フォースト「あなたの負けですね」

(グサっ!!)」

相手生徒「や、やめて!!」

フォースト「女は、嫌いだ!!」

(バーン!!)」

ヤウト「よし..来た。」

アスク「弱いわね」

フォースト「後ろ!!」

(ツパアアアアン!!)」

フォースト「ありがとうヤウト」

メールで返事をする

ヤウト「気をつけてくださいよ?」

アスクメール「ありがとう..終わったら。今日の夜22:00ね?」

お礼、してあげる。」

返事メール「お礼？」

アスク「ひみつ．．」

ヤウトメール「じゃあ。星でも見る？」

アスクメール「うん。」

と言う会話の後だった。

相手生徒「おらー!!」

先生「．．!!!!」

( (バタっ．．) )

先生が倒れる。

アスクメール「今は、集中．．」

ヤウト返事「了解@ヤウト」

フォースト「ここ一体を一度、暗くします．．あなた。見えますか？」

ヤウト返事「僕は、雨とか雪、嵐とか。スナイプに支障がでないものなら。基本いけるよ?@ヤウト」

フォースト「チャンスは、一度切です。いいですか？」

ヤウト「了解@ヤウト」

フォースト「では。ブラックマティニティ!!」

リバリー「どうなっているの？」

生徒「うわ!!」

生徒「ぐあ」

生徒「まじかよっ!!」

リバリー「生徒が消えていく。消したのは、あいつら．．許さない。許さない。うわああああ!!!!」

ヤウト「最高質力チャージ完了．．これより。とどめ。デメトリンクルンレザーで、リバリーリカウド

本名。製襦 瀬名をデリート。リミッターチャージMAX。リミッター解放っ!!!!」

( ギュイイイイイ。ビーン!!バシューーン!!!! )

と。発射音がする。とともに反動が強い。でも、手は離せない。  
ヤウト「うわああああああああああああああああああああ！！！」

僕は、もだえていた。

（（シユン。バアアアアアアアアアン！！！！））

おきな閃光とともに大きな爆発音。

そして、

リバリーに直撃。

リバリー「キヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！イヤアアアアアアアア！！！」

すごい悲鳴。そして、あいつの体がグチャグチャに焼かれていく。  
ものすごいグロテスク。けど敵は、敵だ。

そして、光も消え。やっとその場所が見えるようになったころ。

フォースト「うやったぞおおおおおおおおおおおおおお」

ヤウト「敵、デリート完了。犠牲1・トウルエンド・・・」

と言うと敵が消える。どうもこれは、システムじょう。声にださな  
いとだめらしい。

先生の所へかけよる。

ヤウト「先生！！！！」

アスク「ヤウト君・・・」

先生「お、俺は大丈夫だ。ぐほっ！！！！」

血を吐き出す先生。

これ以上。この中に先生がいるのは、危険。

ヤウト「先生を強制退出後。病院へ。そして、しばしこのプレイヤ  
ーを待機中に設定。」

今回の作戦。訂正、作戦終了。一名重傷。」

先生「君は、何を！！！」

ヤウト「僕が。先生のクラス守ります！！ですから。ですから安静  
に！！！」

先生「すまないがそれは、できない。さっきの結果報告、訂正。

作戦終了。一人、重傷ではなく。一名。マイデリーティング．．  
終了。」

ヤウト「先生！！どうして、そんなことを！！。」

先生「君には、クラスを任せられない。新たな教師を準備作成だ。  
でも。ヤウト．．お前がフォーストを守れ。特にアスクをな？」

アスクは、君の事を．．気にかけている．．うっ．．」

アスク「そんな．．こと。ない／＼」

ヤウト「でも、先生は、一人でしょ？僕達の先生は、あなただけで  
すよ！！！」

先生「しっかりしろ！！ヤウトレザー。お前に。私の全てをたくそ  
う。」

ヤウト「なにを？なにをたくすんです？」

先生「これだ」

ヤウト「これはっ．．ワールドスーツ．．確か。心を開きたる時。

スキルと共になり。スキルの声が聞こえるであろう。でもこれって」  
先生「私は、開けなかった。今の君では、無理だが。

必ずその時が。訪れる。お前が本気で守りたいと思ったとき。

それは、覚醒をする。だから、開け。ヤウトレザー。こころを開  
く。そのときまで．．」

それが先生の最後の言葉だった

先生が僕にのこした。最後の言葉。

けど。最後に言っていた。そのときまで。と。

どう言うことなのだろうか

けど、今の僕の見るべく場所は、前だけ．．

フォースト「どうするんですか、僕達。終わりですよ」

アスク「終了．．」

ヤウト「なにが終わりだっつて？」

フォースト「だっつて、先生が死んだら終わりなんだ」

ヤウト「フォースト！！！！」

（（ガシッ！！））

フォースト「何ですか？いきなり胸倉つかんで」

（（バコっ！！））

アスク「ヤウト．．君？」

フォースト「なんで殴るんですか？」

ヤウト「うりせえんだよ！！勝手に終わりにするなよ！！

僕は、こんな形で終わらせたくはない。

だって、おかしいだろ？一人死んで終わりだなんて。

僕達はまだ生きてる．．だったら。

先生の為にも。犠牲になった学園の生徒のためにも

この戦いを。おわれすべきじゃないんですか！！！」

僕は、初めて。人を殴り。怒鳴りつけてる

ヤウト「大体！！僕は、巻き込まれてるんだ！！

それで、勝手に終わらされて！！

意味が理解できません。

だから、僕は、この戦いを終わらせます！！」

フォースト「分かりましたよ。やってみる価値は、ないわけでは

ないです」

アスク「私は、嫌．．」

ヤウト「アスク！！」

アスク「こんなに人が死ぬのを

見てられない．．

目の前で死んでいく人を見

てられない．．

だから私は。私は．．」

アスクは、走って行く。現実世界の屋上だろう。

フォースト「とにかく帰りましょう」

ヤウト「そうですね バーチャルアウト．．」

世界が元に戻る。

僕は、屋上に直行。

雄太「おい！！香奈鑄さん」

香奈鑄「私は、ここで。現実で．．自分を殺す。マイデリ」

雄太「させないっ!!」

香奈鑄「えっ．．」

僕は、屋上から香奈鑄さんの頭を抑えながら落下。

落ちてる中。

香奈鑄「なにしてるの．．？死ぬよ？」

雄太「死ぬ？しんだっていい。僕は、先生に香奈鑄さんを守れって言われてるんだ。

先生に言われたからじゃない。僕だって。これ以上人が死ぬのを見たくないから。

僕は、守る」

香奈鑄「でも．．この状況でどうやって？」

雄太「こうするのさ!!!!」

僕は、言う。

雄太「バーチャルイン!!!!」

香奈鑄「えっ？」

雄太「アウト!!」

雄太「間に合った。今、くずれかけてる。この世界に一度、着地して。

消える前に。即効。アウト。これで問題ない

僕、誰かを守れたことがないので。

香奈鑄さんだけは、守りたいんです」

「僕は、ニコとして、笑顔を見せ。後姿を見せあるきだす」

香奈鑄「雄太君．．」

雄太「はい？えっ？」

うわぁ!!僕に香奈鑄さんが抱きつく。笑顔をみせ

香奈鑄「ありがとう。守ってくれるのね?」

その顔には、涙が輝いていた。

僕は、黙って抱き返し

雄太「当たり前です。仲間ですから。」

香奈鑄「この後．．暇？」

雄太「暇です．．けど？」

香奈鑄「だったら。来て？」

ぼくは、そんなこんなで。香奈鑄さんのお出かけになって、しま  
った。

たまには、良いと思う。

そして、星が見える所についたころ

香奈鑄「その．．」

雄太「えっ？」

雄太「．．．」

香奈鑄「．．．」

香奈鑄「怖くなったら。また．．抱きついてても。いい？」

雄太「えっ／＼あ。はい。わかりました」

すると。僕の近くに香奈鑄さんの手と顔があった

そして、顔を真っ赤にしながら。

僕の耳元で

香奈鑄「今日は、．．ありがとう。」

とだけいい離れて行く。

雄太「えっ？ちよつと！！えっ？」

香奈鑄「じゃあね」

雄太「あ、はい。ふう。不思議な子ですね」

next

作戦終了 犠牲1名。(後書き)

何とか一度目の戦いを終えた。ヤウト。  
だが、次に戦うのは、残酷な学園。  
そして。一人の少女に会う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9705x/>

---

グット バット ゲーム

2011年11月3日02時20分発行